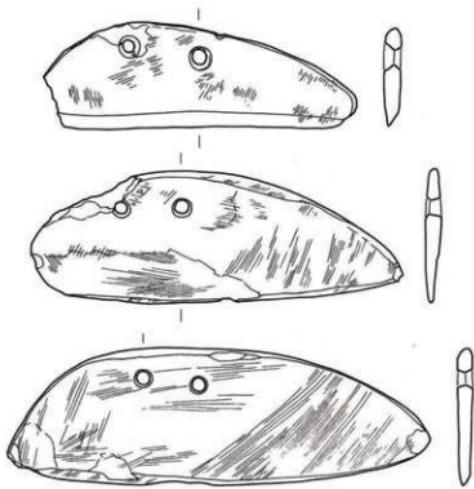


田井中遺跡発掘調査概要・IX



溝 208 出土石包丁 ($S = 1/2$)

2000年3月

大阪府教育委員会



はしがき

河内平野の東南部に位置する八尾市には、地中深くに埋もれた遺跡が数多く存在します。田井中遺跡もその一つで、昭和45年陸上自衛隊八尾駐屯地内の遺跡発見以来、弥生時代稻作を始めたころの拠点的集落として注目されてきました。

大阪府教育委員会は平成2年度から、八尾空港北濠改修工事および一級河川平野川改修工事に伴い、田井中遺跡の事前発掘調査を実施しております。これまでの調査により、弥生時代前期の田井中のムラは、周りに二重の環濠をめぐらしており、内部には竪穴式住居や、倉庫などがあつたことが判明しています。発見された大量の遺物はこの時代の研究の貴重な資料となりました。

今年度の調査では弥生時代前期の溝群、中期の大溝そして木棺墓を発見しました。木棺墓は平成2、3年度の調査につづく3基目の発見となり、田井中遺跡弥生時代中期の墓域の一部を確認することができました。

これらの調査成果により弥生時代の集落の様相がさらに明らかになると共に、地域の歴史像を豊かにしていくものと思われます。

最後になりましたが、調査に御協力いただきました関係諸機関ならびに関係各位に感謝申し上げると共に、今後とも文化財保護行政に一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成12年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は、一級河川平野川改修工事に先立って実施した八尾市空港1丁目、田井中4丁目所在田井中遺跡発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部河川課の依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が技師藤田道子を担当者として実施した。
3. 現地調査は、平成11年6月から平成12年1月まで行い、出土資料等の整理作業は一部現地作業と並行して行い、平成12年3月に終了した。
4. 本書の執筆・編集は藤田が行った。なお遺跡出土の弥生人の骨および動物遺体の鑑定・分析は安部みき子氏（大阪市立大学医学部）にお願いし、原稿を執筆していただいた。
5. 出土遺物の写真は、阿南辰秀、伊藤慎司の両氏が撮影した。

本文目次

はしがき

例　　言

第1章はじめに	1
第2章調査成果	3
第1節　基本層序	3
第2節　主な遺構と遺物	4
第3章考察	14
第4章自然科学的分析	19

挿図目次

第1図　調査区位置図	1
第2図　調査区のわりつけ	3
第3図　南西壁土層断面図	5～6
第4図　全体遺構平面図	5～6
第5図　土坑102遺物出土状況平面図・土層断面図	5～6
第6図　溝201土層断面図	5～6
第7図　溝109遺物出土状況平面図	5～6
第8図　弥生式土器実測図（1）	7
第9図　弥生式土器実測図（2）	8
第10図　弥生式土器実測図（3）	9
第11図　弥生式土器実測図（4）	10
第12図　3号木棺墓実測図	12
第13図　3号木棺墓推定復元模式図	13
第14図　3号木棺墓棺材実測図	14
第15図　田井中遺跡木棺墓位置図	15

表目次

第1表　溝107器種別底径一覧表	15
第2表　溝107壺頸部・体部文様	15
第3表　溝107甕頸部文様	15

第 4 表 溝107出土石器数量表	15
第 5 表 弥生時代前期土器縦年対照	15
第 6 表 田井中遺跡木棺墓比較表	17
第 7 表 出土した齒の計測値	19
第 8 表 出土した動物遺体の計測値	21

図版目次

- 図版 1 弥生時代前期の遺構
- 図版 2 弥生時代中期の遺構
- 図版 3 3号木棺墓
- 図版 4 溝107出土弥生式土器（1）
- 図版 5 溝107出土弥生式土器（2）
- 図版 6 弥生式土器
- 図版 7 弥生式土器
- 図版 8 弥生式土器
- 図版 9 溝206出土弥生式土器
- 図版10 石製品
- 図版11 石製品・土製品
- 図版12 3号木棺墓棺材

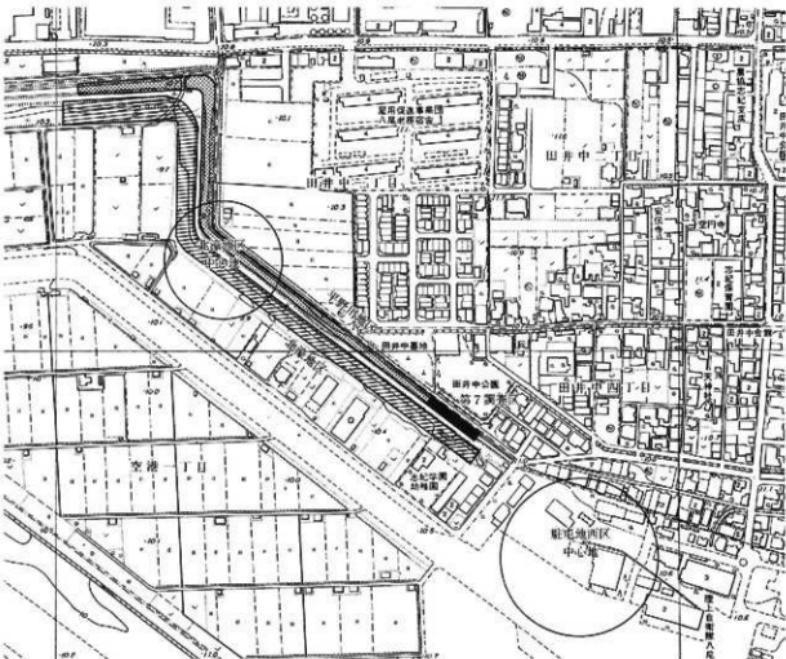
第1章 はじめに

調査に至る経過

田井中遺跡は大阪府八尾市南部に所在する八尾空港北東部付近に広がる遺跡である。1975年に陸上自衛隊八尾駐屯地内で行われた下水道工事の際に弥生式土器が出土したことで遺跡として周知された。大阪府教育委員会では1990年度より空港北濠の改修工事に伴い発掘調査を実施してきた。さらに1995年からはこの空港北濠と平行して流路をとる一級河川平野川改修工事に伴い発掘調査を実施している(第1図)。今年度の調査区は平野川上流部分全長63m、幅約5mの区域で、平野川第7調査区と呼称している。先行して調査が実施された北濠地区1990年度第I調査区(注1)、1991年度第II調査区(注2)の北東側に位置し、平野川調査区第4調査区(注3)の南東部に位置する。

既往の調査成果と課題

1990年度より実施されてきた大阪府教育委員会による八尾空港北濠、平野川改修工事に伴う発掘調査は多大な成果を上げてきた。1994、1995年度に実施された北濠調査区の概要報告書(注4)では田井中遺跡最初の環濠集落について報告がなされている。この報告によると最初の環濠



第1図 調査区位置図

集落は弥生時代前期古段階に成立、その後中・新段階までの短い期間の間に集落の拡大、終焉という三つの過程が読み取れることが判明している。調査担当者の岩瀬透氏は、出土した土器を検出遺構を単位として整理し、田井中1～3式という弥生時代前期前半期の土器編年を組み立てた（注5）。前期古段階に成立した集落の中心地は今年度の平野川第7調査区より約200m 北西方向になる。1999年に刊行された平野川地区の概要報告書（注6）で、調査担当者の亀島重則氏はこれまでに検出された田井中遺跡の遺構を5群にわけ集落の動向を分析している。分析の結果、最初の環濠集落は解体したのち東方にある現自衛隊駐屯地地区内に拠点を置く集団に吸収、統合されたと考察された。西日本各地で弥生文化成立期の前期古・中段階では短期間に近距離内で集落が移動している事例が報告されている（注7）が、田井中遺跡もこの移動現象が認められる遺跡の一つである。

一方最初に遺物が発見された自衛隊駐屯地内では1982年度以降（財）八尾市文化財調査研究会、1994年からは（財）大阪府埋蔵文化財協会、1995年～1996年は（財）大阪府文化財調査研究センターによる発掘調査が実施されてきた。1997年12月に刊行された（財）大阪府文化財調査研究センターによる調査報告書（注8）で、駐屯地正門より西側の駐屯地西区で検出された大量の遺構・遺物が報告されている。報告によると、駐屯地西区では弥生時代前期中段階から中期中葉（第III様式）にかけて活発な集落活動が認められ、この集落は北濠地区から移動した可能性が高いとされている。

既往の調査成果を照合すると今回の平野川第7調査区は北濠地区と駐屯地西区の中間地点にあたり、亀島氏の分析による遺構群でいえば第4群の一角に該当する。これまでに検出された第4群の遺構の内容は木棺墓2基、駐屯地西区との境にある谷、大溝などである。

これらの調査成果を踏まえ、①木棺を主体部とする墓域が広がるか、②駐屯地西区で検出された集落の西限を確認できるか、の2点を特に重視して調査を進めることにした。

（注1）亀島重則『田井中遺跡発掘調査概要・I』（大阪府教育委員会 1991年3月）

（注2）小林義孝『田井中遺跡発掘調査概要・II』（大阪府教育委員会 1992年3月）

（注3）亀島重則『田井中遺跡発掘調査概要・VII』（大阪府教育委員会 1998年3月）

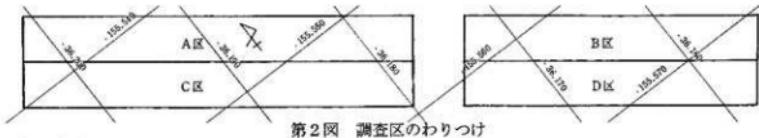
（注4）岩瀬透『田井中遺跡発掘調査概要・V』（大阪府教育委員会 1996年3月）

（注5）岩瀬透「河内平野南部地域における弥生時代前期前半期土器の再検討」『突帯文と遠賀川』（土器寄会 平成12年2月）

（注6）亀島重則『田井中遺跡発掘調査概要・VIII』（大阪府教育委員会 1999年3月）

（注7）『弥生文化の成立－各地域における弥生文化成立期の具体像－』（第47回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 2000年2月）

（注8）『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』（（財）大阪府文化財調査研究センター 1997年12月）



第2図 調査区のわりつけ

調査の方法

調査区は現存の河川内にあるため常時流路部分を確保する必要があった。河川中央は鋼矢板で仕切り、さらに中央を横断する管渠のため、調査はA、B、C、Dの4つの小区に分けて実施した（第2図）。現場作業は現平野川底部に堆積していたヘドロ層を土壤改良した後、重機により掘削し、それ以下の土層は一層ずつ人力により掘り下げ精査した。航空測量の基準は国土座標を使用し、標高はT.P.を使用した。現場での遺物取り上げの地区割りは調査区が狭小で細長く国土座標の地区割を当てはめるのが困難なため河川工事用ポイントを用いた。出土遺物については洗浄、注記をおこない可能な限り実測・復元作業を実施した。現場作業・整理作業は1999年6月に開始し2000年3月に終了した。本概要はその成果の一部である。

第2章 調査成果

第1節 基本層序（第3図）

第0層 盛土、現平野川のヘドロ層である。現況地盤高からヘドロ層底部まで2m堆積している。

第1層 暗緑灰色粘土 調査区の中央部のみに堆積する。

第2層 オリーブ黒色～灰色粘土

第3層 オリーブ黒色粘土

第4層 灰黒色粘土

第1層から第4層までは水平に堆積しており、中世以降の耕作土層と考えられる。調査区西よりでは、第3層と第4層の境に流水による薄い砂層が堆積している。第4層上面には薄く堆積した砂におおわれた足跡状の窪みがいくつも観察された。

第5層 黒色粘質シルト

第6層 オリーブ黒色粘質シルト

第5層は調査区中央部から東部にかけて、第6層は調査区西部に堆積している。4層との層界は凹凸をなしている。これらの層は下層の起伏のある地形を均し埋めるように堆積している。この層が堆積した時点で当該地の大幅な地形の改変が行われ、この層より下層の谷部が埋められたと思われる。これらの層からは古墳時代の土師器、弥生式土器など大量の遺物が出土したがわずかながら奈良時代の須恵器、平安時代の土師器が含まれる。層中に粗砂の広がりが観察され、粗砂の入った踏み込み痕は弥生時代造構面のベース土まで及んでいた。

第7層 オリーブ黒色シルト 第5層、6層が堆積していなかった調査区中央部に堆積する。大

幅な地形の改変がなされる以前にこの層上面は微高地をなしていたと思われる。弥生時代前期の遺物をわずかに含む。

第8層 オリーブ黒色～灰色粘質シルト 調査区中央部の谷部に堆積している。弥生時代前期、中期の遺物を含む。

第9層 黒色粘質シルト 調査区中央部の谷部下層に堆積している。弥生時代前期の遺物を含む。

第10層 黒色粘質シルト～粘土 調査区中央部の谷部下層に堆積している。弥生時代前期の遺物を含む。

第11層 黒色粘質シルトと粗砂のブロック層 調査区東部に堆積する。弥生時代前期、中期の遺物を含む。

第7層から11層は弥生時代遺物包含層である。

第12層 緑灰色粘土～粘質シルト

第13層 灰色粗砂

第12層、13層は弥生時代遺構面のベース土である。第13層は調査区東部の谷部のベース土であるが、湧水が激しい。

第2節 主な遺構と遺物

第4図は第12、13層上面でとらえた遺構平面図である。12・13層より上層で検出され本来の平面プランをとっていない遺構は破線で示した。木棺墓3とその周辺の遺構については第4層を除去した段階で検出したもので、第7層上面の遺構である。

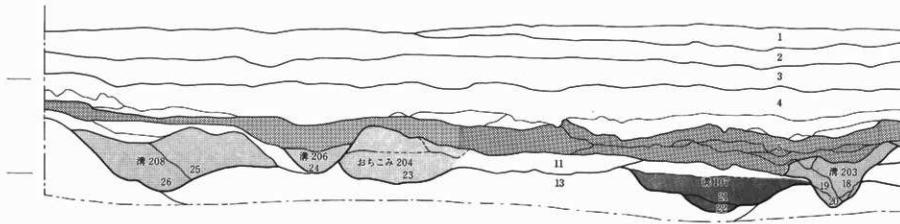
遺構番号は現場作業ではA B C D各調査小区で検出した順につけた。今回概報作成にあたり4つの調査小区の平面図、断面図を集成、検討あらたに遺構番号をつけ直した。平面図を検討すると右岸の調査区で検出した遺構が、左岸の調査区の同じレベル面で検出できなかつたという矛盾点もあったが、土層断面図との照合によりおおむね修正は可能になったと思われる。新たな遺構番号は3桁の数字で現し北西側から順につけた。100番台は弥生時代前期、200番台は弥生時代中期、300番台はそれ以降の時代の遺構である。

弥生時代前期の遺構

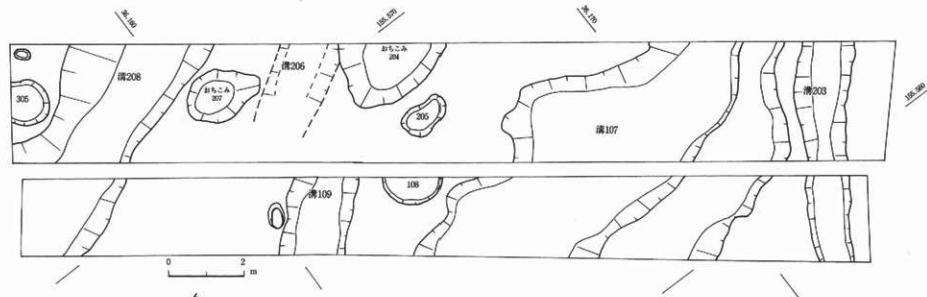
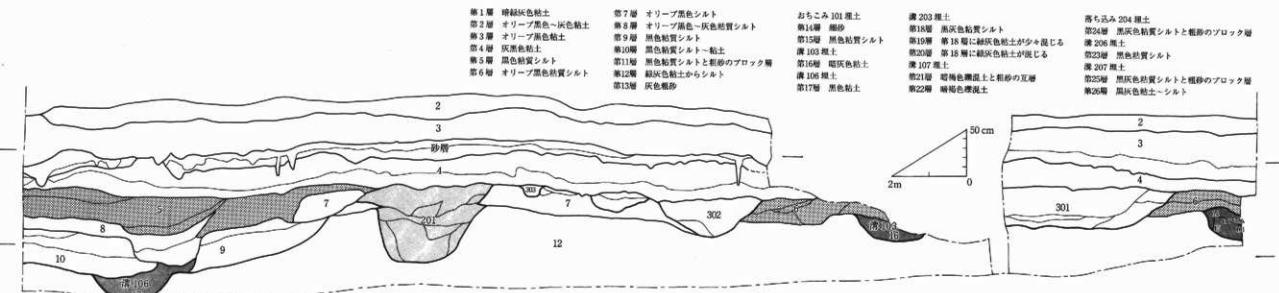
落ち込み101 A、C区北西すみで検出した。東側肩部のみの検出である。検出深さ60cm、弥生時代前期の土器が出土した(第10図6～11)。

土坑102(第5図) A区北西部で検出した。平面形は直角に曲がる溝状であるが東部は上層からの擾乱坑により全容は不明である。最大幅1m5cm、検出深さ35cm、弥生時代前期の土器が出土した(第9図29)。

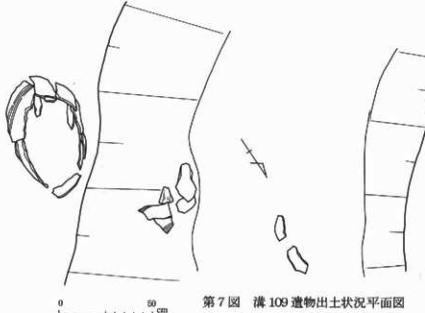
溝103 A、C区西よりで検出した。北東方向に流路をとる。検出最大幅2m50cm、深さ27cm、遺物はほとんど出土していない。上層に擾乱坑があり本来の堀込み面は不明であるが、北濠第II調査区(第1章注2)で検出された弥生時代前期の溝とつながる。



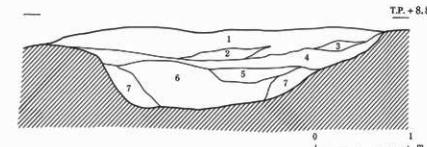
第3図 南西壁土層断面図



第4図 遺構平面図



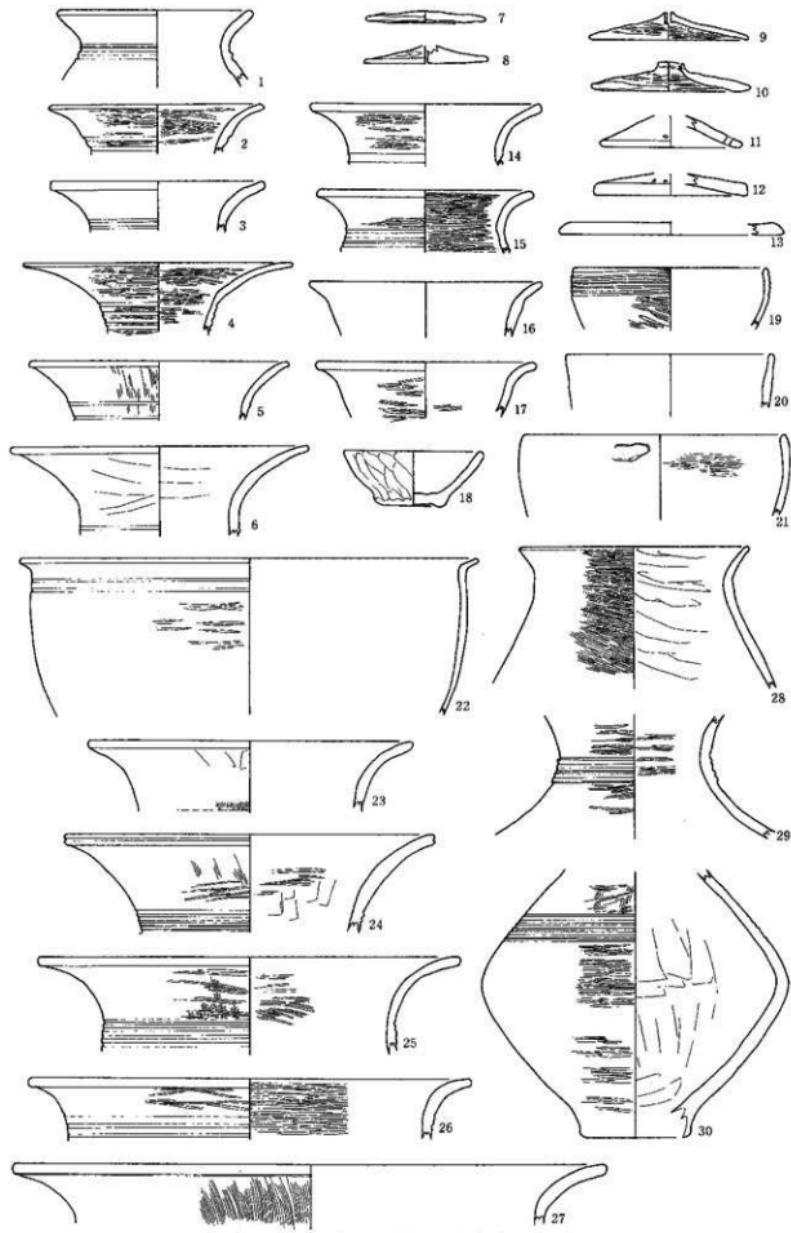
第7図 溝109 遺物出土状況平面図



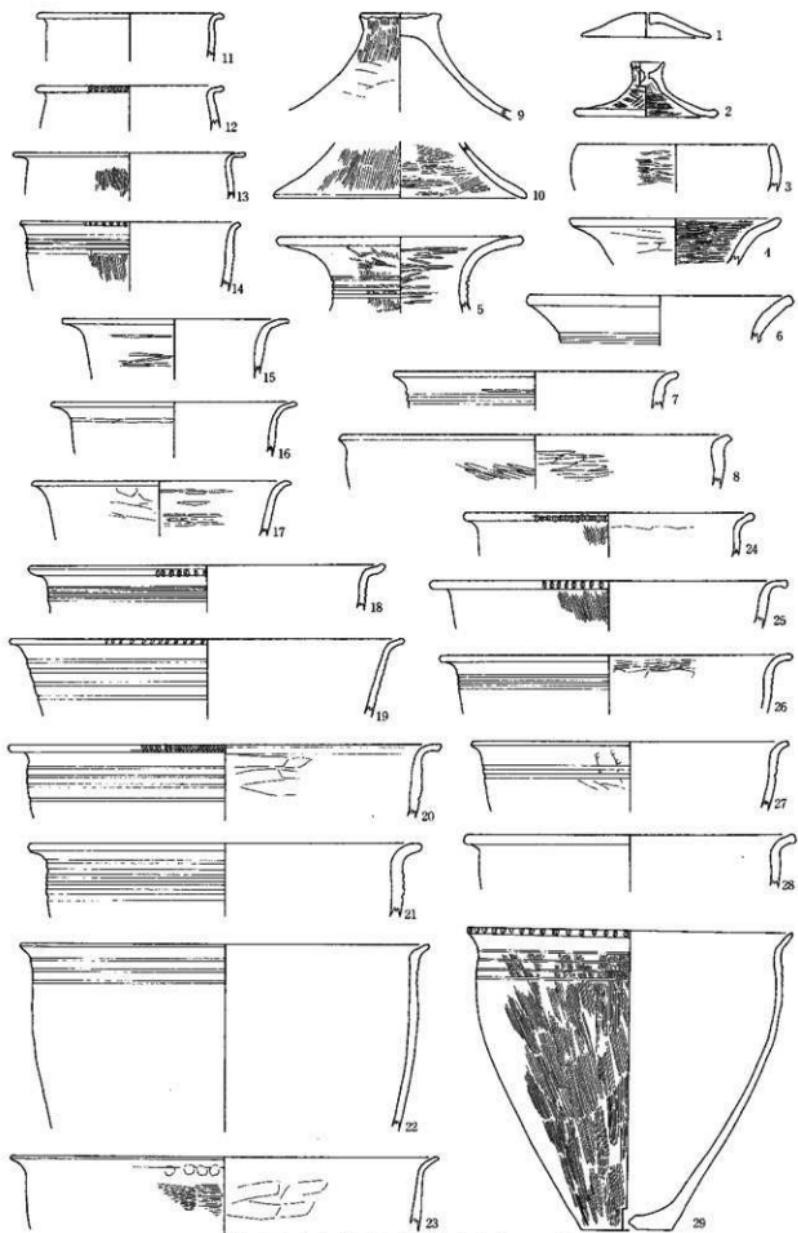
第6図 溝201 土層断面図



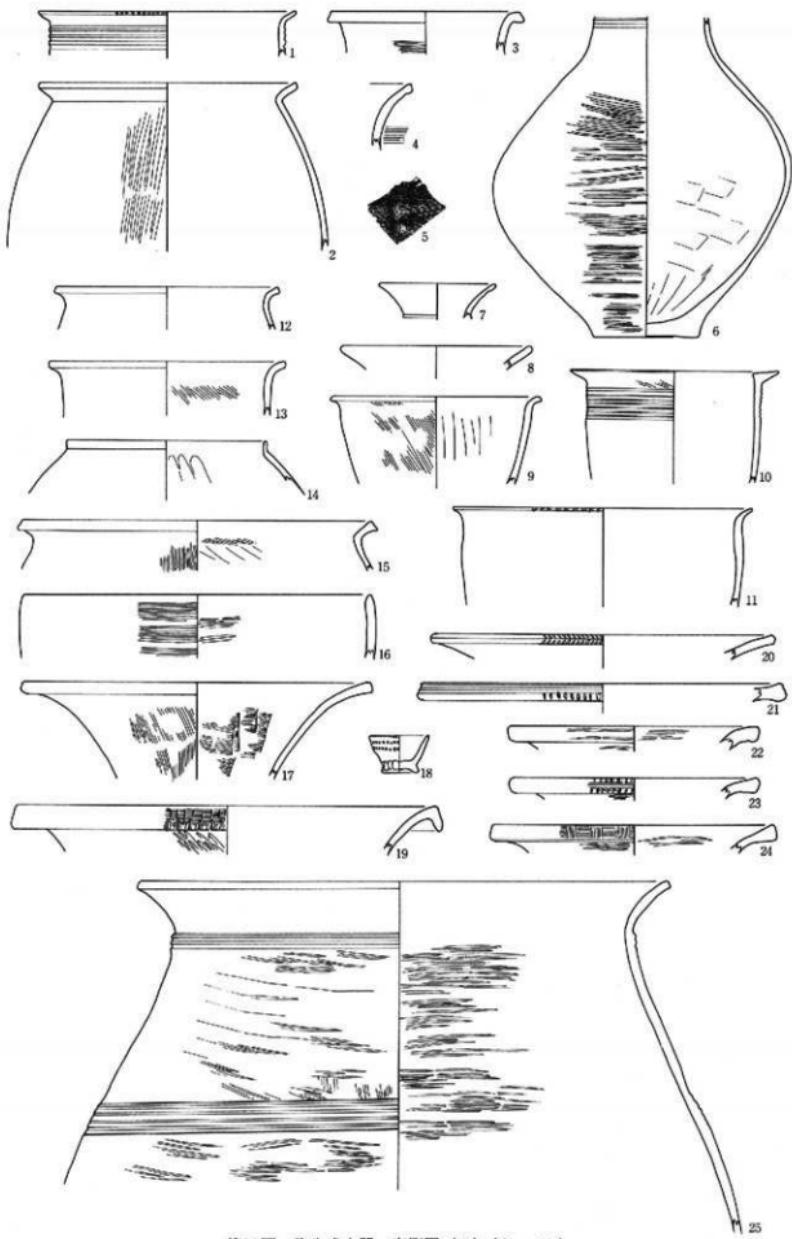
第5図 土坑102 遺物出土状況平面図、土層断面図



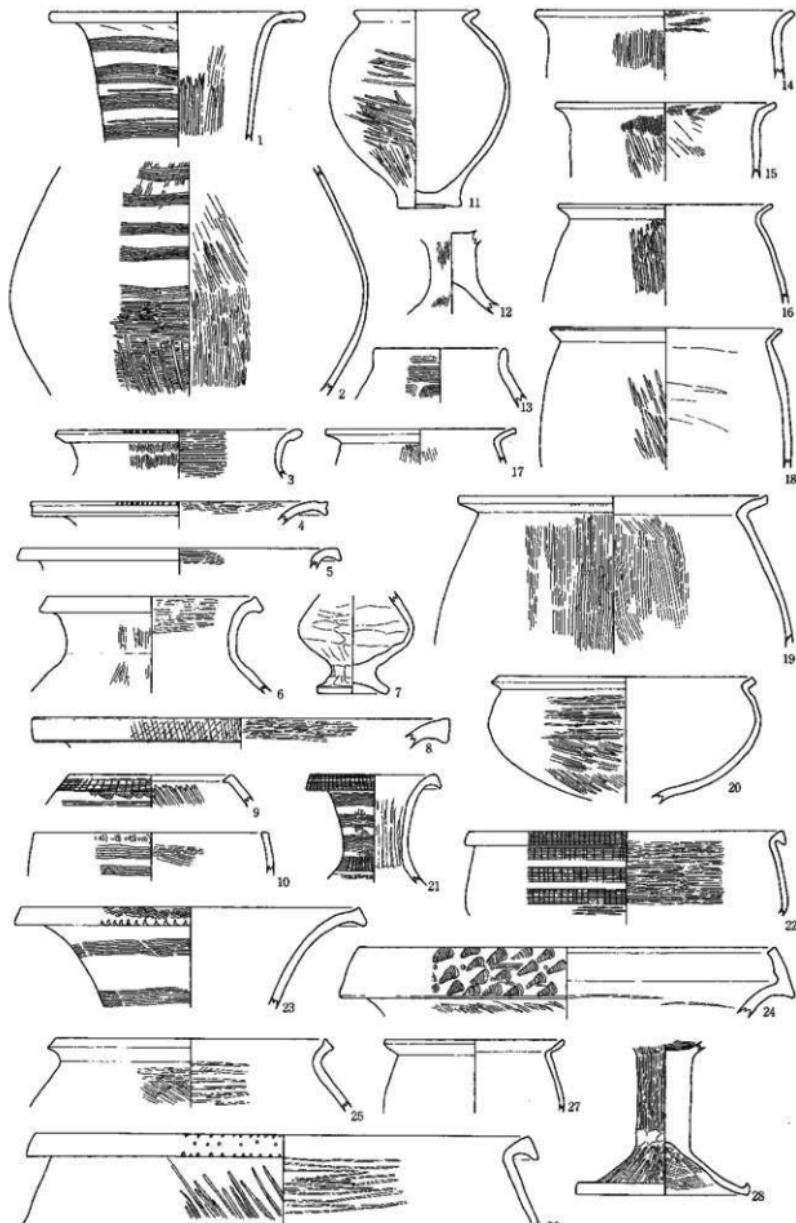
第8図 弥生式土器 実測図(1) (S = 1/4)



第9図 弥生式土器 実測図 (2) ($S = 1/4$)



第10図 弥生式土器 実測図 (3) ($S = 1/4$)



第11図 弥生式土器 実測図 (4) ($S = 1/4$)

土坑104 大部分をA区中央部分で検出した。検出深さ48cm、平面不定形の土坑である。弥生時代前期の土器が出土した。

溝106 C区東端、調査区全体のほぼ中央部で検出した。中央谷部分の最下層にあり、底部の標高はT.P.+7.5mである。北東方向に流路をとる。検出最大幅2m、検出深さ30cmである。弥生時代前期の土器が出土した。第9図1~8はその一部である。

溝107 B・C区西半部約1/3を占める。東北東方向に流路をとる。検出最大幅8m、検出深さ30cm、底部の標高はT.P.+7.6mである。遺構のベース土は溝左岸(北西)で緑灰色粘土、右岸(南東)で灰色粗砂と変化する。左岸側で倒木が重なり、溝全体で弥生時代前期の土器など大量の遺物が出土した。第8図1~30、第9図9~28はその一部である。

溝109(第7図) B区中央で検出した。右肩上でベース土の粗砂上で大型壺形壺の上半部を検出した。出土状態から水ため的な機能を持たして据えられていた可能性も考えられる。(第10図25)

弥生時代中期の遺構

溝201(第6図) A・C区で検出した。C区では第4層を除去した段階で検出した。弥生時代、溝201より40mほど西側は微高地を成していたと思われ、上部に第5層は認められない。北東方向に流路をとる。検出最大幅2m50cm、深さ85cm、断面逆台形、埋土は大きく2層になる。出土遺物は少量であり、第10図2・3は上層、1・4・5は下層の遺物である。201は弥生時代中期初頭に掘削され、徐々に埋没しつつも中期末まで溝として機能していたと思われる。

溝203 調査区中央の谷がほぼ埋没した段階で掘削されている。北々東方向に流路をとる。検出幅1m30cm、深さ45cm、断面U字形である。少量の遺物が出土した。第10図12~19はその一部である。

落ち込み204 D区で検出した。調査区外に広がっているため平面形は不明であるが、検出深さ30cmである。ベース土の砂疊層にくいこむような状態で多量の遺物が出土した。第10図20~24はその一部である。

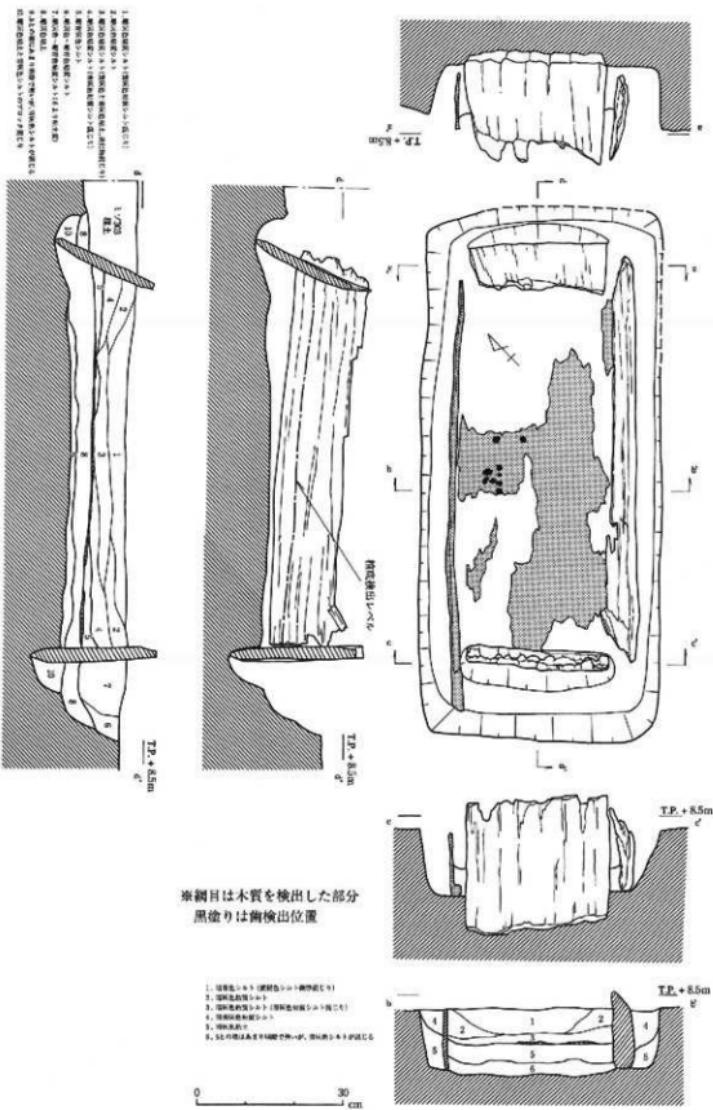
溝206 D区東部で第5層を除去した段階で検出した。検出最大幅2m、深さ25cm。多量の出土遺物の一部が第11図20~28である。

溝208 調査区東部で検出した。右岸ではベース土が灰色粗砂から緑灰色シルトに変わり、それと共に検出レベル高もT.P.+8.6mと上がる。出土した多量の遺物の一部が第11図1~10、12~19である。また石包丁など磨製石器がまとまって出土した(写真図版10-11~15、11-1~3、9~12)。

落ち込み207 溝208の下層、ベース土の粗砂上面で検出した。平面形は格円形状で、検出深さ約40cmである。第11図11はその出土遺物である。

落ち込み204、207、溝206、208は検出位置、出土遺物からみて調査区東部にひろがる駐屯地西区弥生時代中期の集落に関連するものと思われる。断面観察によると溝206は落ち込み204、

溝208が埋没してから掘り込まれており、少なくとも弥生時代中期の遺構面は2面あると思われる。また出土土器の器種構成、文様なども204→207→208→206という順に新しい要素が加わっていくことが読み取れた。



第12図 3号木棺墓実測図

3号木棺墓（第12図） 遺構番号は北濠第I調査区、第II調査区で検出した木棺墓と通し番号をつけ3号木棺墓とする。第4層灰色粘土を掘下げ、第7層上面に薄く堆積している暗緑灰色粘土シルトを除去した段階で小口板の上端を発見し、周辺を精査して墓坑掘り方を検出した。周溝は伴わない。

墓坑掘り方は長さ110cm、巾49cmの長方形、主軸方位はN-53°-E、第7層上面からの検出深さは約13cmである。掘り方東側のライン及び棺内の埋土は一部上層からの溝303により擾乱されている。

木棺は小口板、側板、底板を組み合わせた構造である。棺の内法寸法は長さ78cm、巾35cmである。北東側小口は棺内に斜めに倒れた状態で検出した。北西側側板と底板は木質状の痕跡を検出し、棺材全体を取り上げることはできなかった。底板は板材でなかった可能性もある。蓋板は存在したか不明である。

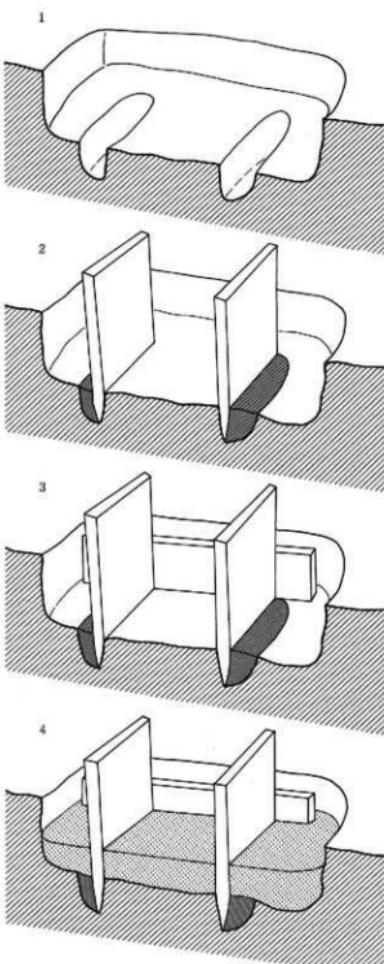
小口板（第14図1・2）は両方とも1枚の板で構成されており、幅約30cm、厚さ約3cmである。南東側側板（第14図3）は約78cm、最大巾14.6cm、厚さ約3cmである。現場で確認した北西側側板の痕跡は長さ約89cm、巾約14cm、厚さ2cm～5mmである。側板は小口板より外側に小口板を挟みこむように据えられている。墓坑内土層断面図を観察すると小口板は、墓坑底部より約7cm深く埋め込まれており、側板も棺底より約6cm深く埋められている。これらのことから構築方法を復元してみる（第13図）。

1、 墓坑を掘る。この時墓坑底面は平らでなかったと思われる。さらに墓坑底面の短辺部に溝状の掘込みを設ける。

2、 小口板を溝に立て、裏込め土を入れる。

3、 小口板をはさみこむように側板を立てていいれる。

4、 側板を安定させるため裏込め土を入れる。この時、棺内部にも土を入れ底面を平らにな

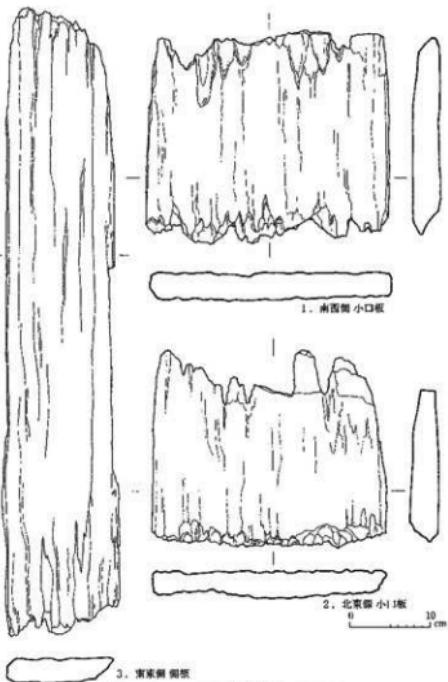


第13図 3号木棺墓推定復元模式図

らしたを思われる。その結果棺底のレベルが高くなつた。

木棺内中央の棺底直上から数点の人間の歯が出土した。棺底検出レベル面は北から南に斜めに傾いており、また北側小口板は棺内に倒れ込んだ状態で検出したことから、出土した歯は本来遺体が埋葬された位置より移動した可能性が高い。鑑定は安部みき子氏（大阪市立大学医学部）に依頼した。資料を一見された安部氏から全く磨滅していない永久歯が含まれており被葬者は6才前後の幼児であると御教示をいただいた。

木棺内からは歯以外に棺内に落ち込んだ土から弥生式土器の細片が1点みつかっただけである。木棺の墓坑は弥生時代前期の遺物を含む第7層上面よりほどこまれており、また同じ第7層上面から弥生時代中期II様式にさかのぼる溝201を検出していることなどから、3号木棺墓は弥生時代中期前半の遺構としたい。



第14図 3号木棺墓棺材実測図

第3章 考察

今年度の調査では、弥生時代前期の溝、中期の溝、木棺墓などを検出した。これらの調査成果がこれまでの田井中遺跡の調査成果とどうつながるのかまとめてみたい。

(1) 田井中遺跡(駐屯地西区)の西限について

調査区東端の溝208右岸から遺構面の標高は一気に70cm近く上がり、ベース土の緑灰色シルト上面に安定した集落が広がるのが読み取れた。溝208はここより東部に広がる駐屯地西区の集落居住域の縁辺と取れる。第1章で述べたように駐屯地西区を居住域とする集落は弥生時代前期新段階から中期まで活動している。弥生時代中期の遺構・遺物は今年度の調査区の東半分に認めら

	近径(cm)															
	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
雄グループ	♂非生糞頭尾重	2	6	12	17	12	7	2	1	1	1	1	71	71	71	71
	♂平均頭尾重							2	3	1	1					7
雌グループ	♀合計重	0	2	6	12	19	15	13	7	3	0	0	1	1	78	78
	♀平均頭尾重	1	11	14	16	8	6	3							59	59
雄グループ	♂合計重							2								2
	♂平均頭尾重															
		合計	11	111	165	161	85	51	33	0	0	0	0	0	0	61

第1表 漢107器種別底径一覽表

登録部		上のみ 削出 (複数)	下のみ 削出 (複数)	削出実帯		沈線文		貼付実帯		多 条					
				沈線文		多 条		多 条							
		沈 綫 文	沈 綫 文	多 条	多 条	多 条	多 条	多 条	多 条						
豊 頭 部	始 土	非生駒西龍座	3	3	2	3	2	5	8	1	2	4	1	34	
		生駒西龍座			1			1	5	1			8		
合計			3	0	3	3	3	2	6	13	2	2	4	1	
豊 体 部	始 土	非生駒西龍座	3	2	3	1	8	1	6	14	11	6	8	2	65
		生駒西龍座							1					1	
合計			3	2	3	1	8	1	7	14	11	6	8	2	66

第2表 满107出土壺頸部、体部文様

		沈湖						合計
		南出井用機器、及 口詰め割り用機器、及 少条	多条	面積 うちもの	無文			
東部	非 生 物 質 地 上 土	有	2	1	2	3	8	
		無	2	2	3	4	11	
		不規	2	4	2	9	17	
	生 物 質 地 上 土	有		1			1	
		無					0	
合計		2	8	6	14	7	37	

第3表 溝107出土壺頸部文様

	石綿 （未製品）	尖頭器	刀器	石柄	制片	二次加工のある制片	細片	
個数	1	2	3	2	10	4	3	25
重量(g)	3.2	73.7	193	183.8	197.6	223	8.9	883.5

第4表 構107出土石器数量表

赤堀 (1968)	寺沢・森井 (1989)			東側文 土 壤
古墳層	I-1	北端地区 田舎中1式 ・高4.0m 下層・中層 底4.0m 土坑4.0m 住居跡4.0m		
中庭層	I-2	駐屯地地区 9.5-2区 ・落ち込み8.4m	北端地区 田舎中2式 ・高4.0m-1 4.0m-2 ・洋房4.0m 4.0m 4.0m 4.0m	北端地区 田舎中1式 ・高4.0m-1 4.0m-2 上層 4.0m-2 上層
衛生層	I-3			駐屯地地区 9.8-3区 落ち込み5.3m ・4
衛生層	I-4		平野田 落丁調查区(今年度) ・高1.07	

第5表 弥生時代前期土器編年対照

れ、とくに遺物の出土は溝208・206に集中していた。

これに対し弥生時代前期の遺物は調査区全域に認められるが、調査区中央の谷地形の底部に検出した溝107からは大量の前期の遺物が出土した。田井中遺跡では前期の段階に北濠地区から駐屯地西地区という近接地区での集落の移動現象が認められる。両地区の中間地点にある今年度調査地点は前期の段階にどのような位置をしめるのか、出土遺物から二つの地区との時間的前後関係を追うことができるかどうか、溝107の出土遺物を分析してみる。

107の資料は調査区内で完結しない溝からのものであり、ある程度の時間幅をもつ一群と考えられるが、時期の比定を行うためにあえて分析を試みた。まず土器について考えてみる。器種構成は口縁部が残存し図化し得たものから判定した。

壺は 1. 口縁部が短く外反するもの、2. 1より口縁部がさらに発達するもの、3. 長い頸部と大きく開く口縁部をもつものの、4. 口縁部が30cm以上の大型壺の4タイプ、甕は外反する口縁部をもつ倒鐘型のもの、鉢はバラエティにとみ 1. 口縁部が内湾するもの、2. 口縁部が直口するもの、3. 口縁部が外反するもの、4. 楠型で小型のものの4タイプが認められる。蓋類は甕蓋、壺蓋があり、壺蓋は円盤状のものと笠型のものが認められる。

器種構成比率と法量については口縁部の残存部分が少量で誤差が大きいことから大量に出土した底部の径を測定し、少数点以下を四捨五入して集計した（第1表）。底から体部にかけて緩やかに立ち上がるものを壺底グループとし、底部から斜め上方に約50度以上の角度で直線的に立ち上がるものを甕底グループとした。鉢底部はどちらかのグループにわかれていったという問題は残る。

文様については壺頸部、体部、甕頸部の文様について分類した（第2・3表）。文様が終結していないなくても3cm以上の破片は資料とした。

集計の結果、溝107の土器はおおむね次のような特徴をもつ。

- ・器種—壺は口縁部が発達し、大きく開くものが主流になってくる。鉢はバラエティに富む。
- ・法量—壺は底径10cm、甕は7cmのものが中心である。
- ・胎土—肉眼での観察であるが生駒西麓産のものは少ない。
- ・調整—壺の外面調整は不定方向のハケ調整で仕上げたものが目立つ。感覚的には粗い仕上げと受取れる。
- ・文様—壺の文様は頸部、体部ともに沈線文多条が主流を占めている。甕の文様は口縁端部刻目の無いものが半数をこえ、頸体部境の文様も本数は少ないが沈線が主流である。この場合沈線と沈線の間隔は広い。
- ・特筆すべきは突帯文土器（長原式土器）が一点も出土していない。

また107出土の打製石器の数量表は第4表である。20g、5cm前後の剥片が中心で、肉眼での観察では金山産と思われるものは無い。2点の尖頭器はいわゆる石槍状のものである。

以上の分析から溝107の出土遺物は弥生時代前期新段階の中頃から後半の時期に比定できる一

群であり、田井中遺跡北濠地区の集団が駐屯地西地区に移動してまもなくと考えられる時期である。弥生時代前期土器編年と対照してみたのが第5表(注1)である。溝107はこの時期の駐屯地西地区居住域の西限と考えられる。107より西部は北濠第II調査区で検出された溝群が示すように耕作地としての土地利用がなされていたと思われる。

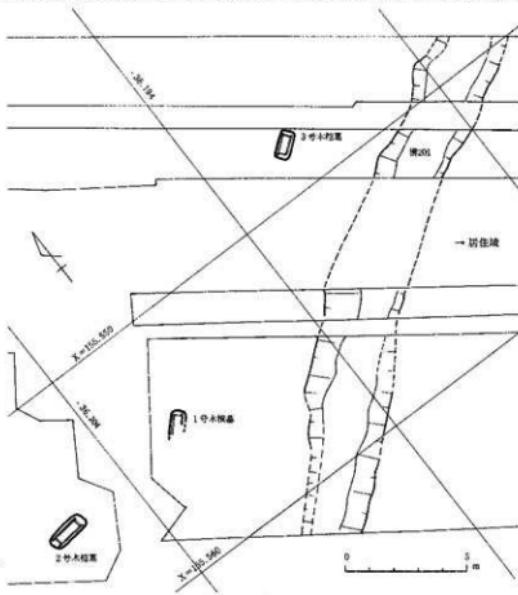
107は谷状地形を利用した溝と思われるが、この谷が埋没して弥生時代中期にはいり駐屯地西区の西限として位置するのは溝201であろう。溝201は自然地形を利用した溝107とは異なりベース面が緑灰色シルトの掘削しやすい場所に大溝にふさわしい規模で掘り込まれている。中期には居住域を区切ることに前段階より強い意思が働いたのかもしれない。

(2) 田井中遺跡の木棺墓について

田井中遺跡でこれまでに検出した木棺墓は3基となった。3基の木棺墓の位置を示したのが第15図である。3基とも弥生時代中期前半の周溝を作わない木棺墓であり、大溝201に沿うように並び、居住域と区切られた場所に墓域を形成している。

3基の木棺墓を比較したのが第6表である。3基とも副葬品は出土していない。被葬者の年齢にかかわらず、木棺の型式は小口板を墓坑底面より深く埋め込み、側板は小口板を挟むよう据える組み合わせ式である。

弥生時代の組み合わせ式木棺についてはこれまでに型式分類の研究がなされている。畿内では瓜生堂遺跡出土の木棺をもとにして小口板と底板をいかに組み合わせるか、側板は底板の上にのせるか否かという観点から、木棺が四つの型式に分類されて



第15図 田井中遺跡木棺墓位置図

地区	墓坑掘り方(cm)	木棺内法寸法(cm)		墓坑主軸方位	被葬者年代 性別	備考
		長さ	幅			
1号木棺墓 北濠第I地区	現存長115	65	15	現存長100	37 N-40° -E 7~8才 男	木棺は北側小口と西側側板の一部が生存
2号木棺墓 北濠第II地区	160	60	15	121	40 N-87° -E 17~25才 男	
3号木棺墓 平野川第7調査区	110	49	13	78	35 N-53° -E 6才前後 男	

第6表 田井中遺跡木棺墓比較表

いる（注2）。この分類では底板の存在が前提となる。さらに福永伸哉氏は棺材（とくに小口板と側板）をいかに倒れないように組み合わせるかという固定法から、木棺をI. 葬坑床面掘り込み式、II. 底板上組み合わせ式、III. 葬坑切込み式の三つの型式に分類している（注3）。福永氏の分類のI型式では底板の存在は重視されない。

田井中遺跡の木棺墓はこれらの木棺の型式分類にあてはめると3基とも福永氏分類のI. 葬坑床面掘り込み式にあてはまり、さらに今年度検出した3号木棺墓は小口板、側板を裏込め土でしっかりと厚く固定した結果、棺底のレベルが上がる、上げ底状になっている点に特徴がある。

弥生時代中期の木棺墓がまとまって発見されている河内平野の遺跡は、先述の瓜生堂遺跡の他に山賀遺跡（注4）、鬼虎川遺跡（注5）などがある。これらの遺跡では田井中遺跡の木棺墓と違い、木棺が方形周溝墓の主体部として検出されているものが多い。

田井中遺跡では今回木棺墓が検出されたのは駐屯地西区を中心とする居住域の西側にあたるがこの居住域より東側には弥生時代前期後半の方形周溝墓が1基検出されている（注6）。前期後半から中期という時間の間に墓域の移動がみられたか、あるいは墓制のちがいにより埋葬場所を変えたか、この点については今後の資料の増加を期待したい。

（注1）第1章注8の第12章第3節、田坂佳子氏作成の表33に加筆・訂正させていただいた。

弥生式土器編年については、佐原 真「山城における弥生式文化の成立—畿内第I様式の細別と雲の宮遺跡出土十器の占める位置」『史林』50巻の5号 1967年

寺沢薰・森井貞夫「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編 I 木耳社 1989年
第1章注5岩瀬論文を参考にした。

（注2）田代克己他『瓜生堂遺跡III』（瓜生堂遺跡調査会 1981年）

（注3）福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32卷第1号 1985年

（注4）西口陽一他『山賀遺跡（その3）』（大阪府教育委員会、大阪府文化財センター 1984年）

（注5）勝田邦夫・曾我恭子『西ノ辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書』（（財）東大阪市文化財協会 1994年）他の報告書による。

（注6）第1章注8に同じ。

最後に、調査の実施ならびに本書の刊行にあたっては、佐藤三和子、藤川富久子、および大阪府文化財調査事務所の諸氏の援助を得た。また以下の方々にご指導、ご助言いただいた。堀江門也、中井貞夫、岩崎二郎、阿部幸一、岩瀬透、亀島重則、小林義孝、本間元樹（敬称略）記して謝意申し上げます。

第4章 自然科学的分析

安部みき子 (大阪市立大学医学部)

第1節 田井中遺跡出土の弥生時代人の歯について

田井中遺跡の弥生時代中期前半の3号木棺墓から、被葬者のものと思われる歯のみが出土した。これらの歯は、いずれも歯冠のみであり破損の大きいものもあったが、歯種の同定ができるものがあり、それらの計測値と萌出状態から性と年齢を判定した。

出土状況

完全な形で歯冠が残存し計測できたものは、左右の上顎第1大臼歯と左下顎第1大臼歯である。第2大臼歯は半分は損しているため左右と上顎、下顎の同定はできなかった。さらに、上顎と思われる大臼歯の破片、犬歯または小白歯の歯冠の一部と上顎切歯の一部が出土している。

年齢と性の推定

出土したすべての歯の咬頭には咬耗の跡がなく未萌出か萌出直後であったと思われ、年齢は6才前後と推定される。歯冠計測値を山田ら(1986)の現代日本人のものと比較すると(第7表)、本遺跡のものの方が上顎第1大臼歯の頬舌径を除いたすべての計測値が大きく、男性であった可能性が高い。

参考文

Yamada H, Kogiso T and Lio JY 1986 Correlation matrices for the mesiodistal and buccolingual crown diameters Japanese and Chinese permanent teeth. 人類誌94 : 473-479

田井中遺跡 3号木棺		現代人 男性	
	頬舌径	近遠心径	頬舌径
上顎第1大臼歯	右	11.43	10.80
上顎第1大臼歯	左	11.54	11.03
下顎第1大臼歯	右	11.34	12.24
			11.20 11.75

単位は mm

第7表 出土した歯の計測値

第2節 田井中遺跡出土の動物遺体

弥生時代前期から中期の田井中遺跡から出土した哺乳動物遺体は、シカ、イノシシとイヌの3種であった（第8表）。

前期の層からはイヌの尺骨、シカの第10胸椎の椎体とイノシシの環椎部が出土したのみであった。これらの骨は比較的の保存が良かった。イヌの尺骨は遠位部が破損しており、正確な数値は得られなかつたが、残存している部位の最大長は138.75mmで、破損している遠位部は数mmと推定される。この計測値を小野寺ら（1987）のシバイヌの値と比較してみると、現世のシバイヌのオスの範囲ないであった。弥生時代はイヌの種類が多く、その大きさは小型犬から中型犬のものまで生息していたため、尺骨の計測値からの性の判定はできなかつたが、その体格は現世のシバイヌのオス程度の大きさであったと思われる。イノシシは、環椎がほぼ完全な形で出土し、その計測値から成体と思われる。

中期の層はイノシシのみが出土した。下顎第2大臼歯は未萌出と思われるものと進んだ咬耗を持つものとが出土している。下顎第3大臼歯も咬耗がわずかに認められるものと、最後方の咬頭が完全に放出していないものが出土している。このことより、イノシシの最小個体数は2である。

参考文献

- 小野寺覚、茂原信夫、江藤盛治 1987 骨格による性の判別—シバイヌについて、解剖誌
62:19-32

資料番号	遺構番号	時期	種名	出土部位	左右	残存部位	計測値	備考
622 溝107		前	イヌ	尺骨	右	遠位部破損	肘頭長 25.62 滑車切痕上部前後径 21.16 滑車 切痕中央前後径 12.58 鋸状突起前後径 17.8 滑車切痕幅 14.82	
209 溝107		前	シカ	第10胸椎	一	椎体		
658 溝107		前	イノシシ	腰椎			腰椎最大高 48.72 前弓前後径 26.08 後弓前後 径 19.34 前椎孔横径 59.04 前椎孔高 26.71 閘 筋突起間距離 72.94	
269 溝107		前	不明	肋骨その他				
273		中	イノシシ	側頭骨	左	頸骨突起		
639 溝208		中	イノシシ	下顎骨片	不明			
639 溝208		中	イノシシ	下顎第4小白齒	右			咬耗はむづかしいあり
575 溝206		中	イノシシ	下顎第2大臼齒	左			未萌出と思われる歯冠
639 溝208		中	イノシシ	下顎第2大臼齒	左			咬耗は進んでいる
639 溝208		中	イノシシ	下顎第2大臼齒	右			咬耗がむづかしいあり
575 溝206		中	イノシシ	下顎第3小白齒	左			萌出完了寸前
639 溝208		中	イノシシ	下顎第3大臼齒	左			萌出完了寸前
639 溝208		中	イノシシ	下顎第3大臼齒	右			
559		中	不明					
659		前～中	イノシシ？	脛骨	右	骨幹のみ		
352		前～中	シカ	脛骨	右	外側膜		
343		前～中	不明	長骨片		2片		

第8表 出土した動物遺体の計測値

報告書抄録

ふりがな	たいなかいせきはつくつちよさがいよう・IX
書名	田井中遺跡発掘調査概要・IX
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤田道子、安部みき子
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	2000年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たいなかいせき 田井中遺跡	やおしくうこういつ ちょうめ、たいなか よんもゆうめ 八尾市空港 1丁目、 田井中4丁 目	27212	69	34° 35' 58"	135° 36' 19"	平成11年6月 ～平成12年3 月	315	平野川改修 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田井中遺跡	集落	弥生時代前期	溝・土坑	弥生式土器、 石器、木器	弥生時代中期の木棺 を主体部とする墓域 を検出

図 版



(南西から)・写真中央が今年度第7調査区

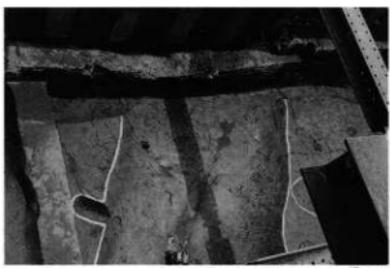
- ・左手前が北瀬地区中心地
- ・右上方が陸上自衛隊駐屯地



落ち込み 101



土坑 102 遺物出土状況



溝 103



溝 104



溝 105 遺物出土状況



溝 106



溝 107 土層断面



溝 201



溝 201 土層断面



溝 208 土層断面



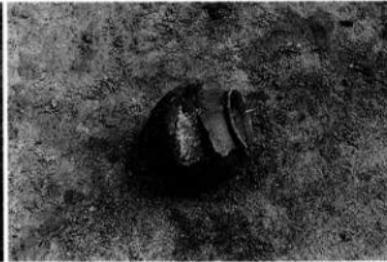
溝 206



溝 208



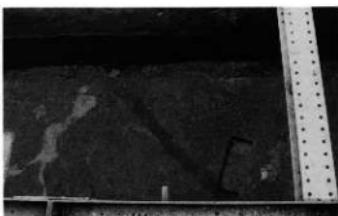
溝 206 遺物出土状況



溝 208 遺物出土状況



3号木棺墓 墓坑 挖出状況



3号木棺墓と周辺の遺構



南側小口部分（南西から）



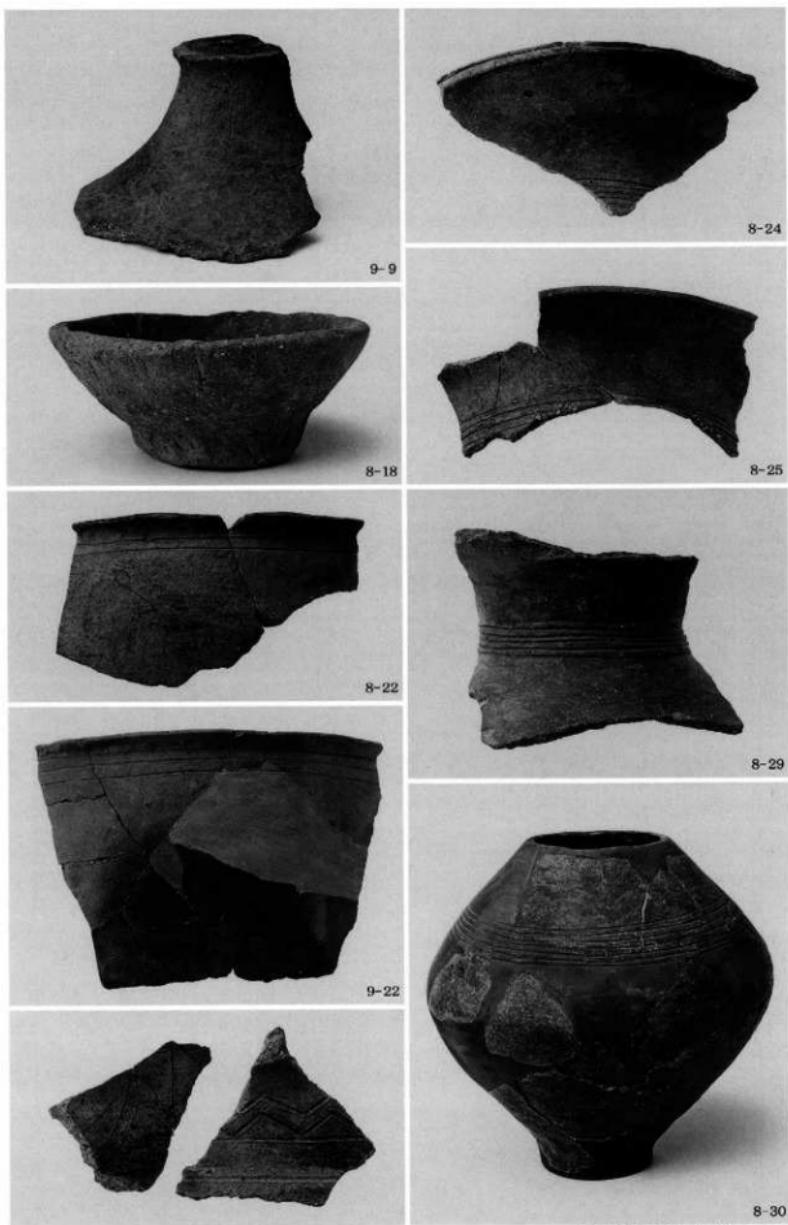
3号木棺墓



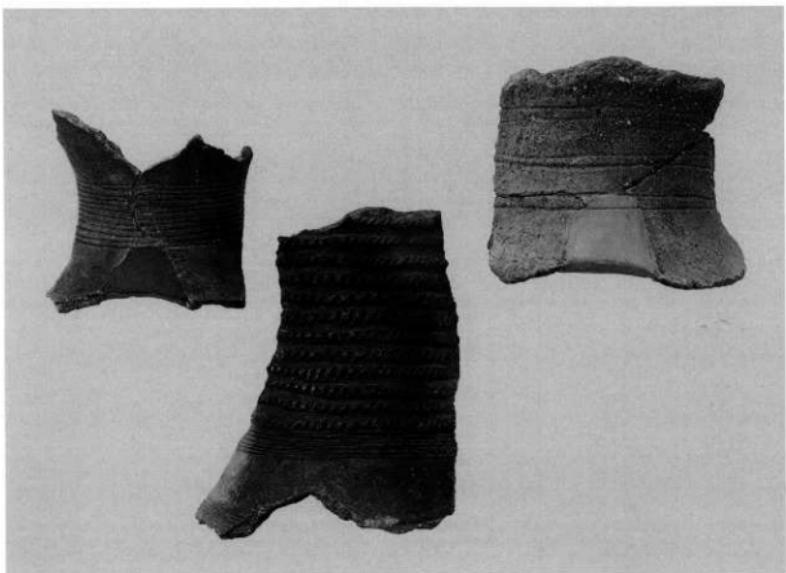
北側小口部分（北東から）



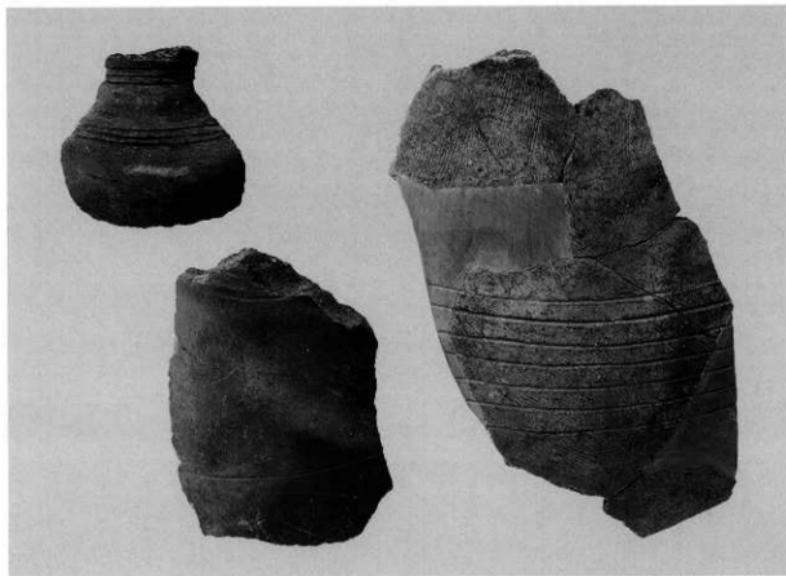
木棺内 葬出土状況



※番号は挿図番号と対応している。



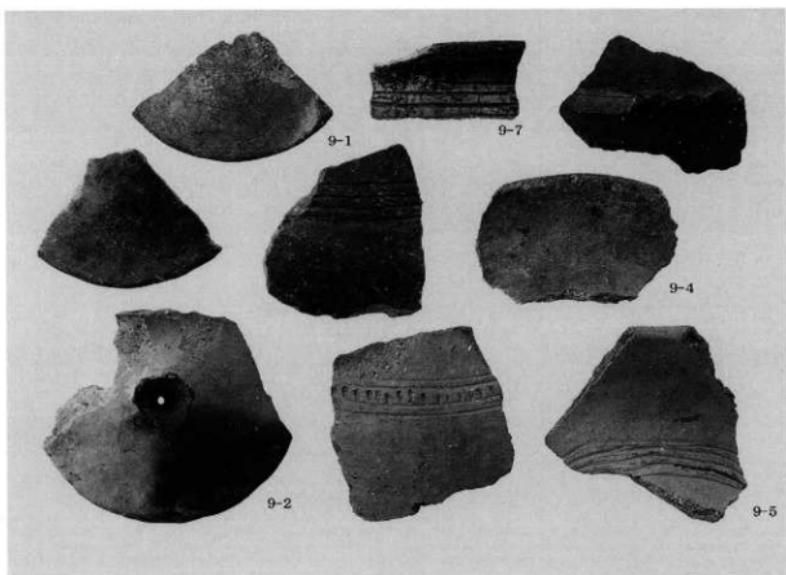
・頭部に文様をもつ土器片



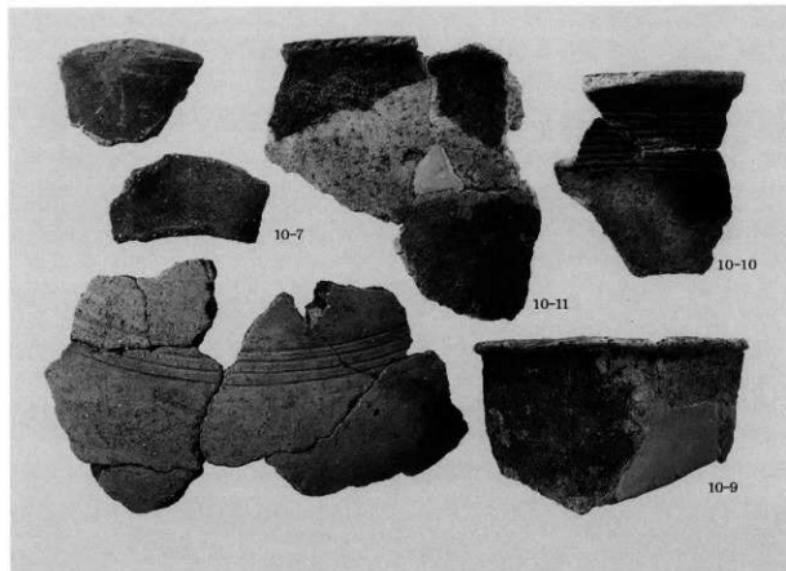
・体部に文様をもつ土器片



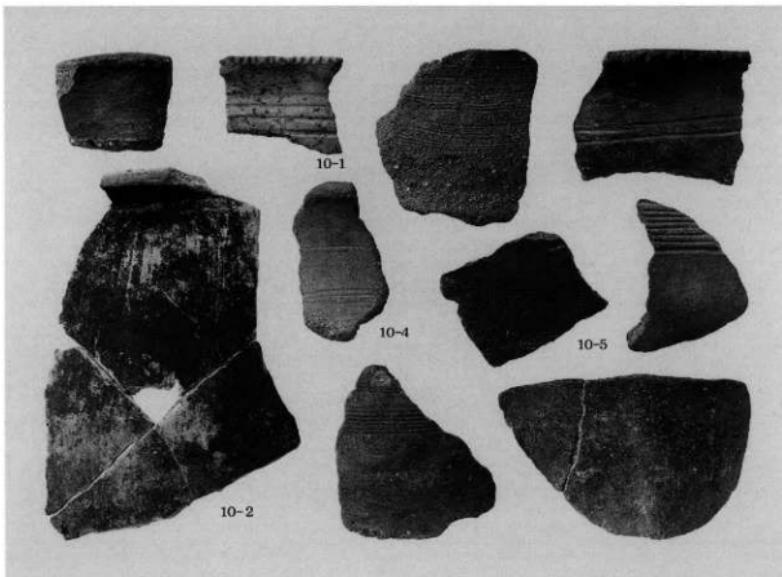
*番号は挿図番号と対応



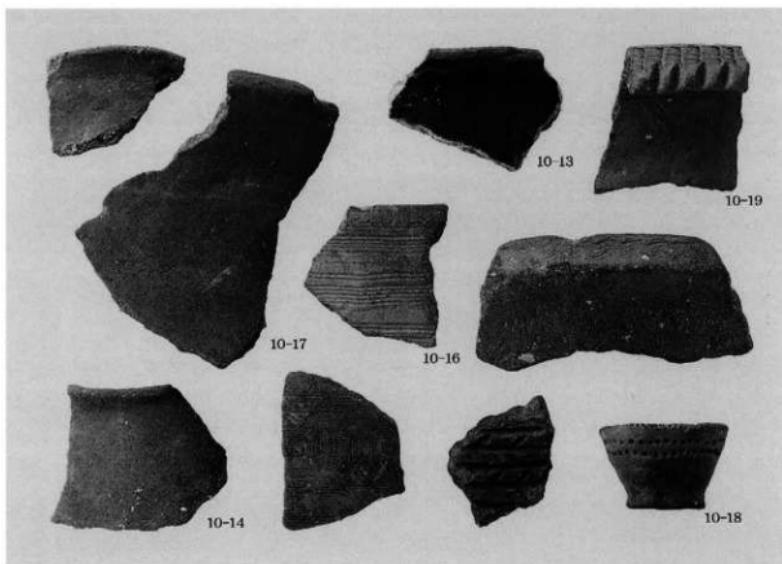
溝106出土 弥生式土器



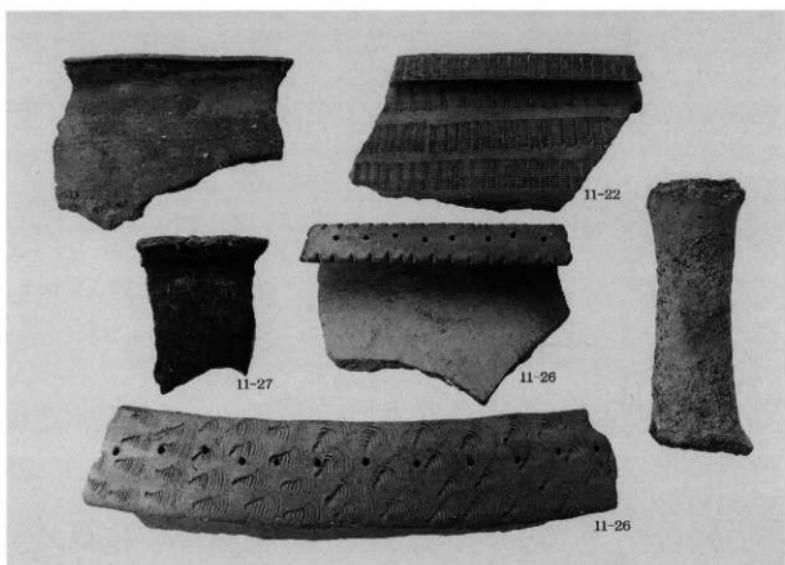
おちこみ101出土 弥生式土器
※番号は捕図番号と対応



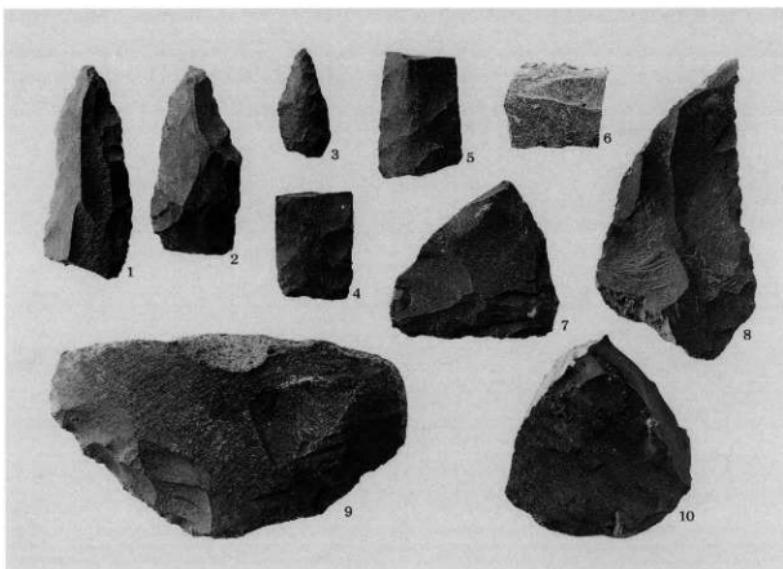
溝 201 出土 弥生式土器



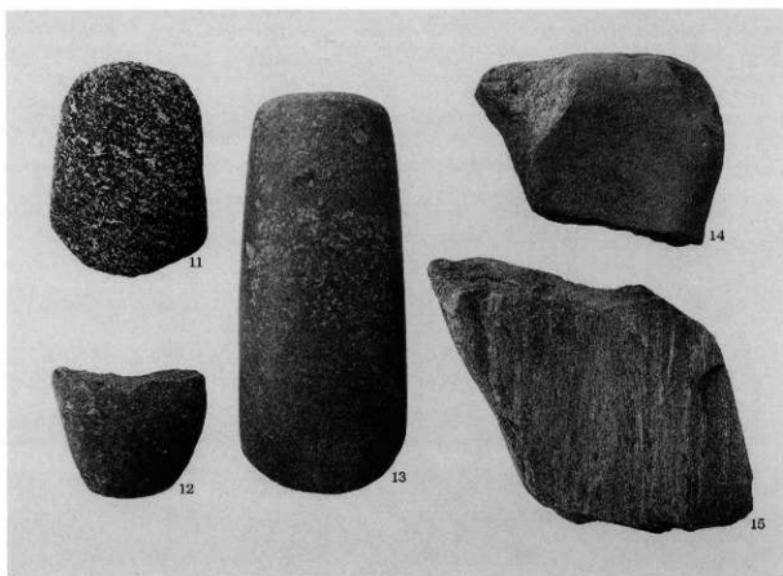
溝 203 出土 弥生式土器
※番号は捕囲番号と対応



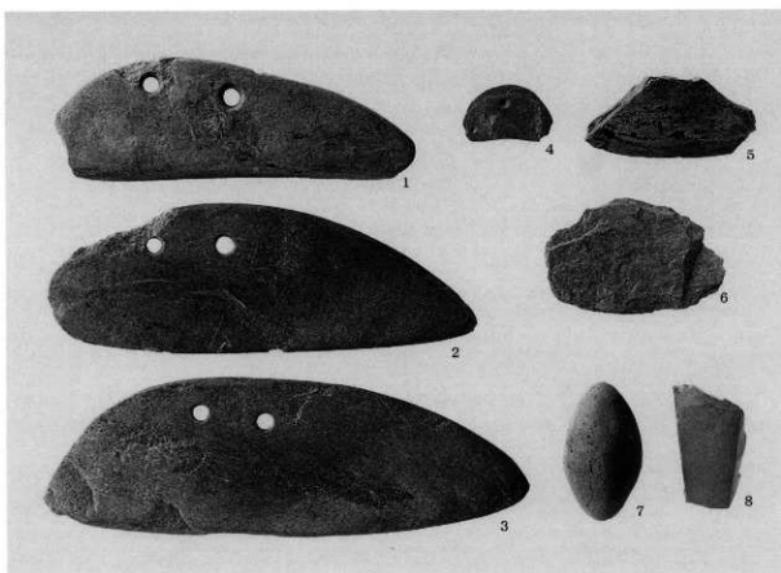
※番号は挿図番号と対応



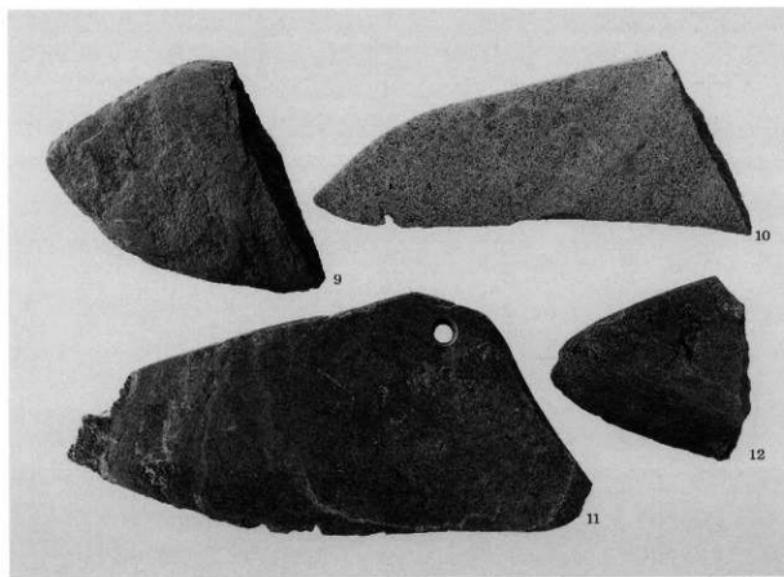
1～4、7,10, 溝 107 出土 5, 溝 106 上層出土
6, 溝 203 出土 8, 溝 206 出土 9, 溝 201 出土



11～15, 溝 208 出土



1～3、8 槽 208 出土 4、7 槽 107 出土
5、6 蒸し込み 204 出土



9～12、槽 208 出土

